

倭語 (ヤマトコトバ) 原語学提要

# 日本語 解体新書

第1卷

鈴木 寛山<sub>著</sub>

*Suzuki Kansan*

## 著者略歴

### 鈴木寛山（すずき・かんさん）〈本名 鈴木寛〉

1914年6月4日、栃木県氏家町に生まれる。

1934年上京して神田の高等精密工学校・芝浦の芝浦高等工学校・日大の社会科学等に学ぶ。

1940年陸軍兵器本部機械課に入所。

1942年4月20日応召宇都宮市第14師団第36部隊に入営。留守部隊勤務。アッツ島玉砕を始め、次第に戦況苛烈となり、野戦志願して中支方面の湘桂作戦に参加。

1947年4月氏家町役場に入所。その後、教育委員会教育次長兼庶務課長、町立氏家老人ホーム初代院長を歴任。実に役場奉職25年。

1972年4月1日定年退職。同日会津若松市の採石工場設立に参加。翌年第一次石油ショックにより辞職。病を得て療養、爾後悠々自適の生活に入って今日に至る。

## 日本語解体新書 第1巻

---

初版1刷発行 1999年12月1日

著 者 鈴 木 寛 山

発 行 者 瓜 谷 綱 延

発 行 所 株式会社文芸社

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-13-16

電話 03-3202-0910(企画)

03-3202-2552(営業)

振 替 00190-8-728265

印 刷 所 株式会社 平河工業社

---

乱丁・落丁本はお取り替えます。

©Kansan Suzuki 1999

ISBN4-88737-415-1 C0081

倭語 (ヤマトコトバ) 原語字提要

# 日本語 解体新書

第1卷

江苏工业学院图书馆

藏书章

鈴木 寛山 著

Suzuki Kansan

文芸社



## 〈第1巻〉緒言

1984年（昭和59年）3月末、熱海水葉亭に2泊3日して子供達が私の古希の賀宴を開いてくれた。最早人生70かと思うとドシット落込んだが、喜寿の祝いもキットするからと励まされて、人生まだまだ先があると気を取直したが、それも束の間、同年8月姉が83歳で亡くなってまたまた無常感に襲われた。それを察してか姉の嗣子阿久津敏雄君が“何か書いて残したら！”と勧めてくれた。

生来の筆不精で葉書1枚よう書いたこともないが、それだからこそ“何か書いて残したろ！”と妙に心が動いた。

と言って特に別に研究した事もないしで、何を書くかが当面の問題となった。そこで取敢えず、70年来使いなれた『日本語』について書いてやろうと思付いた。

ここで言う『日本語』とは、ヤマトコトバ（倭語）のことである。漢語・漢字語や欧米語からのカタカナ語は、それぞれの辞典をひけばその意味を知る事が出来る。だがしかし日本語の基調であるヤマトコトバ（倭語）は、国語辞書を引いてもどれ一つの単語でさえもそのコトバの意味を知ることが出来ない。例えば“ありがとう”を辞書を引けば“感謝を現す挨拶のコトバ”とあるだけで、コトバの意味は全然説明されていない。すべてのヤマトコトバ（倭語）はどういう場合にどういう風に使われるかと言う「例証」を沢山あげて「コトバの概念」を説明するが、何故そうなのかと言う「コトバの意味」を教えてはくれない。日本人は「日本語の基調」であるヤマトコトバ（倭語）を空覚えに覚えてコトバの真の意味も分らずにいたずらに使っているのである。これは不合理な事で日本人は誰しもがイラダタシク感ずることである。私はこの（倭語＝ヤマトコトバの解明）を本書の命題として、“ヤマトコトバ（倭語）の原語原義”を探究する『倭語原語学』を創始・誕生せしめ、その考え方道程結果を書いてみようと思う。但し倭語の原語については、先人も先生も

いない。誰一人として考えた人もなければ、その研究の本もない。

私は今、深い物思いに耽りながら、大型バスで立山アルペンルートを下だっている。時は昭和59年10月1日、果てしない弥陀ヶ原は七彩の紅葉に装われて、この世ならぬ極楽世界を現出している。倭語原語学の創始によってヤマトコトバがベールを脱いで美しい真の姿を現す時、そのあでやかな麗わしさはさぞやかくあろうと私の幻想は膨らむ。

私達の民族語倭語その解明『倭語原語学の創始』は、さぞや困難なものに成るに違いない。しかしそのあとを継いで完成してくれる者が必ずや現れるに違いないと確信して、私は今こそその第一歩を踏み出してやろうと、決心のほぞを固めている次第である。

1984年（昭和59年）10月1日、立山弥陀ヶ原・奥志賀道中にて

蟬しぐれ 途絶えて虫の すだく声 寛山

# 目 次

## 〈第1巻〉緒言 3

### 序論

- 倭語はどこから来たのか? 8
- 日本語は混合言語である 10
- 日本語の文法 12
- 日本語の発音 16
- 日本語最大の難点表記法 27
- 仮名文字の発生 31
- 中国語と日本語（その伝来と比較） 35
- 中国語倭音化十三大法則 42
- 倭語原語原義探求の4原則 44

### 倭語単語篇

#### § 1 日常挨拶語 49

#### § 2 数詞（カズ） 84

- カズの名の起り 84
- 倭名数詞の由来 86
- 漢名数詞の由来 103
- 概数の原語 110

#### § 3 時制詞（トキ） 277

- トキの原語 279
- 時の基本語 282
- 時に関する語 290
- 時の区分 444

## 〈第1巻〉結語 463



# 序 論

## 倭語はどこから来たのか？

世界の言語学者・日本語学者・国語学者は長い間日本語のルーツを世界に求めて日本語の親族語を捜し求めたが、それは悉く失敗に終わった。言語学的に世界に日本語の親族語はないと言う事がハッキリした。

①ドイツ語・オランダ語・スカンジナビア語・英語等のチュートン系、②アース語・ゲーリック語・ウエールス語・ブリュタニュー語のケルト系、③フランス語・スペイン語・タカラン語・ポルトガル語・イタリア語・ルーマニア語のロマンス系、④ロシア語・ウクライナ語・ポーランド語・チェッコ語・スロバキア語・ブルガリア語・セルボクロアチア語・スロベニア語のスラブ系、⑤リトアニア語・レット語のバルト系、⑥ギリシャ語、⑦アルバニア語、⑧アルメニア語、⑨ペルシャ語、⑩ベンガル語・ヒンズー語・ウルドー語・セイロン語の現代印度諸語のⅠ印欧語族でもなく、

①ラップ語、②フィンランド語、③エトワニア語、④チエレミス語・モルドビン語、⑤ハンガリー語のⅡフィン・ウグリア語族でも無く、

①タシュト語、②ベルベル語、③アラビア語、④エチオピア語、⑤ヘブライ語、⑥マルタ語のⅢセム語族でもなく、

①タシュト語、②ベルベル諸語のⅣハム語族でもなく、

①中国語、②チベット語、③タイ語、ビルマ語のⅤインド…中国系でもなく、

①インドネシア語・マレー語・ジャワ語・タガリグ語、②フィジー語、③タヒチ語、④マオリ語のⅥマレーポリネシア語族でもなく、

①トルコ語、②タタール語、③キリギス語のⅦトルコタタール語族でもなく、

①タミール語、②テルゲー語、③カナラ語のⅧドラビダ語族でもなく、

①カファイル語、ズルー語、スワヒリ語、コンゴ語、ルバールルア語のⅨバンツ語族でもなく、

モンクメル、ベトナム、ムオン、ムンダ語等のⅩのオーストラリア・アジア語群でもないと言う。

世界の言語学者の研究によれば、日本語は朝鮮語・満州語・バスク語等と共にその系統が分らないという。日本語は言語学的にその語群も系統も親族語も不明で分らないと言う。則ち日本語は文法・発音・単語の3点で、世界の他の言語に類似対応するものがないと言うことである。文法が対応しても、発音が対応せず、発音が対応しても単語の類似がないと言う事で、言語学的に日本語のルーツを探って日本語の原義を探ろうとすることは不可能であると言うことで、全く新たな観点から日本語の原語・原義を探らなければならないと言うことである。

想えば1万年間の平和と豊饒を楽しんだ縄文時代末期、突如として戦乱の中国大陸を逃れて、揚子江 yangzi jiang ヤンツーキャン>yasi ka（河 he ワ）ヤスカワ（天の安河）を降って、日本列島に倭人が稲作を持って押し寄せた。史書に言う、“倭は呉の太祖の裔なり”と。山東半島から揚子江下流に下って呉の国を建てたのは倭人である。倭語とは倭人の言葉で、倭語原語とは倭人の使った中国語である。倭は日本であり、倭語とは日本語である。想えば遙か以前の倭語原語を、今現代中国語で探ろうとするのが『倭語原語学』である。果たして日本語原語は、中国語伝来であるのだろうか？！！

## 日本語は混合言語である

新しい観点とは、日本語は古来から文法・発音・単語がユニットで固定発展したものでは無く、比較的不変的な文法をベースとして他の言語の発音や単語を取入れて発展した混合言語であると言う考え方である。これは“世界中に日本語と同系統語は全く無い”と言う世界の言語学者の研究結果と一致するのである。ヨーロッパ語は幾つかの祖先から枝分れしていく。例えばラテン語からフランス語、スペイン語、イタリア語と言う風に系統がハッキリしている。ところが日本語はそうはいかないのである。系統の違う言語が混合しているのである。例えば文法は北方ツングース語系、発音は南方インドネシア語系、単語は大陸中国語系の組合わせである。日本語はツングース語の文法だけが残ってその発音も単語も失われ、北方語文法に南方語発音と中国語単語の組合わせの3種混合言語である。

こう言う「混合言語の存在」は、従来ヨーロッパ言語学上存在しないと言う事になっていたが、実際には世界に屢々存在するのである。

例えば韓国語は文法と発音は違うが単語はオール漢語である。しかも独立後は漢字を廃してハングル文字としたから、今に日本語の倭語と同じ様に原語原義が分らなくなるのではないかと他事ながら心配である。

ところが日本語はズットズット深刻である。古代日本語には文字がなかったから単語だけ入り、後に漢字が渡来して字義に関係なく漢字の音を借りてコトバを写したから、原義を探る事は愈々深刻な困難になったばかりか、漢字には音・義があるからその字義によって解釈する事になり、完全に理解不可能となってしまった。これが今の問題なのである。

さて日本人の性格は非常に他民族文化摂取に熱心である。従って日本語は又外来語が非常に多いのである。日本語の中に漢語・カタ

カナ語は8割を占めている。しかも近年の猛烈なカタカナ語の氾濫は、日本語が混合言語の性格を有する事の有力な証拠でもある。

この傾向を見れば古代に於いても矢張り猛烈に外来語があった事は自明の理であろう。

この混合言語の存在は他にもある。現在ハワイには「ビジョン英語」があつて標準英語と競合していると言う。「ビジョン英語」とは、メラネシア、西アフリカ、中国等多くの地域でかつて使われたり、現在も使われている「ビジン英語」の俗称であると言う。英語を元に中国語、インドネシア語、アフリカ諸語等の単語や文法を取入れた混成英語で、ハワイのもその一つで、標準英語で“I can not do”をビジョンでは“no can do”と言ひ、“He is not here”を“He no come”等と言うと言う。この例は中国語の文法を元にして、英語の単語を借用したものである。

ある言語の中で最も変化しないものは文法であり次に発音で、最も変わり易いものは単語である。文法は固定しており、発音も変わり難く、単語はより高い文化語をドンドン取入れて変化発展する。これはソックリ日本語の性格である。

『日本語はツングース語系の文法をベースにして、発音はインドネシア語系に変化し、単語は北方中国語を外来語とし、後に主体単語とした混合言語である』と仮説したい。

この仮説に基づき、次に日本語の基底をなす文法と発音について述べていく事にする。

# 日本語の文法

日本語の文法の最大の特徴はその日本語型語順（主語＋目的語＋述語）である。

“日本語は、系統の違ういろんな言語が、北からも南からも流れ込んだと考えないとダメなんです”と日本語混合語説（但し語順から言えば西方へ繋がり、単語から見ると南方に近いと言う）を唱える産業能率大教授文学博士安本美典氏によると、日本語型語順は世界の言語の種類の中で、数から言うと世界で一番多い多数派だと言う。それは中国語を取囲んで東から、アイヌ語、朝鮮語、満州語（現在の中国東北部）、モンゴル語、ウイグル語（ウイグル族はトルコ系）、それからチベット語、ビルマ語、東欧系言語系言語でも語順は日本型のパキスタンのウルドゥ語・バングラデッシュのベンガル語やインドの南のタミール語、アフガニスタン語、イラン語、トルコ系の言語、欧州のハンガリー語、北のフィンランド語など全て日本語型語順だと言う。これはユーラシア大陸にはもともと日本語型語順が行われていて、後から中央に漢民族が勃興して中国語語順が日本語型語順を周辺に追いやったのだと言う。私も文法に関する限りこの説に全面的に同感である。

更にこの主語＋目的語＋述語の日本語型語順は、詳しくは次の4語順が特徴である。

第1、形容詞・副詞は、形容される言葉の前に来る。

第2、目的語は動詞の前に来る。

第3、述語は文末に来る。

第4、助詞はつく言葉の後に来る。

の4特徴となる。更に細かい特徴を言えば、

第5、冠詞・性別・単複別・関係代名詞がない事等のアルタイ語的特徴がある。この特徴は私達が欧米語を学習する時に、最初に当面して困惑する特徴的差異である。

第6、屈折語に似て接尾詞によって品詞等の区別が出来る。

屈折語 (inflectional language) とは、インド・ゲルマン語族やセミチック語族等のように、語形・語尾の曲折 (変化) によって、語の文中における諸関係の性質を持つ言語で、名詞・形容詞は性・数・格を、動詞は人称・数・時・法・態などに応じて一定の変化をするものを言うと言う。

日本語の場合はこのような語形・語尾の変化ではなく、接尾詞によって品詞・法を変えるのである。例えば

- (1) 語尾イは形容詞、
- (2) 語尾クは副詞、
- (3) 動詞語尾音素 e は命令形、u は終止形、
- (4) 各音節にン・ツ・ーを付ければ擬音語となり、
- (5) 各音節にラ・リ・ルイ・ロ・をつければ擬態語となる。その他

第7、日本語はウラルアルタイ語等の膠着語 (agglutination language 付属語・粘着語・漆着語・接統語) で、語の文法機能を語根と接詞との連合接統 (膠着) によって示す言語でその語尾変化は屈折語の如く密接でなく、語根内の変化まで伴わないと言う。接詞の中には接頭詞・接尾詞があるが、同じウラル・アルタイ語属でもアルタイ系言語のトルコ語・モンゴル語には接頭詞があるが接尾詞がなく、ツングース語には接尾詞があって接頭詞がなく、ウラル系語属 (フィン・ウグリア語系のフィンランド語ハンガリー語及びサモエード語) にも接頭詞はなく、日本語には接頭詞も接尾詞もある。

#### 第8、動詞の活用語尾変化

さて日本語は法的機能を持つ助詞や接尾詞を膠で着けたように単語の後ろに後から後からくっつけて行く⑦膠着語法でその語幹は決して変化しないが、

- (1) 膠着した語尾が変化しないものと、
- (2) 膠着した語尾が活用するものがある。
- (1) 無変化語尾には名詞・代名詞・数詞・副詞・連体詞・接統詞・

感動詞があり、

(2) 活用語尾のものには動詞・形容詞・形容動詞・助動詞等がある。中でも口語・文語の動詞活用は複雑である。口語動詞には日常使用の五段、上一段、下一段、カ変、サ変等があり、他方には文語動詞の四段、ラ変、ナ変、下一段、上一段、上二段、下二段、カ変、サ変等の活用がある。文語動詞の活用になると余りにも複雑なので、大抵の日本人は理解不可能で、この様に複雑な動詞の活用語尾変化は日本語文法の特徴の一つである。

第9、その他日本語の特徴には、男性語・女性語・敬語等の特別の用法がある。

#### 第10、省略語法

さて以上のように日本語は一見コチタク複雑な文法に支配されていて日本語の理解使用は非常に困難に見えるが実は文法は非常にフリーで、その上日常省略語法が使われていて、全く文法的に簡単自由である。その理由は

(1) 語順に関係なく意味を伝達出来る事である。

一応日本語文法の語順は1（主語＋目的語＋述語）であるが、2（目的語＋主語＋述語）でも3（目的語＋述語＋主語）でも4（述語＋目的語＋主語）でも5（述語＋主語＋目的語）でも同じ意味になる。例えば1（私は＋貴方が＋好きです）でも2（貴方が＋私は＋好きです）でも3（貴方が＋好きです＋私は）でも4（好きです＋貴方が＋私は）でも5（好きです＋私は＋貴方が）でも意味は全く同じである。

(2) “私は”の主語を省略して“貴方が好きです”と言っても意味は同じである。会話体ではその上に目的語までも省略し只“好きです”“好き！”と使われる。これは千年以前の徒然草の時代から現代の会話まで連綿として続く日本語独特の省略語法である。

則ち日本語の省略語法は、主語・目的語を省略して動詞主体の語法である。

しかし一般的な日常会話体では更にさらに省略を進めて動詞まで省略する事がある。例えば近所同士で路上で行きあった時の挨拶は

“どちらへ？”又は“どこへ？”が普通である。東北地方で知人が道で出会った時の挨拶は“ドサ”、“ユサ”であると言う。“サ”は方向を示す動詞で、例えば“東京サ行くだ”等と使う。“ドサ”は“ド・サ”で、“貴方はどこへ行くのですか？”であり、“ユサ”は“ユ・サ”で、“私は湯に行きます”の省略体である。こう見てくると日本語は、結局は1音節・1音節に集約され、1音節毎に意味があり、その音節を組合わせ連結した連鎖語（Ringword）又は連環語（Linking language）であると言える。この1音節毎に意味があると言う事は、中国語とソックリで、自在に中国語を日本語化させる可能性を示している。

この省略語法の存在理由を考えると、どうしても1音節1義～数義と考える訳にはいかない。これは孤立語である中国語の音節と全く同じである。古代において日本語は極く簡単な1音節・1音節の語を喋っていたのに相違ない。例えば“食う”は“口クチのク”の“クー”であり、1人称も又“俺ア”“我オ”“吾ウ”“余ヨ”等と1音節であったに違いない。日本語を研究する為には同様な中国語との音韻対応を研究する必要がある。